

ちくし しやかた  
筑紫氏館跡

鳥栖市教育委員会



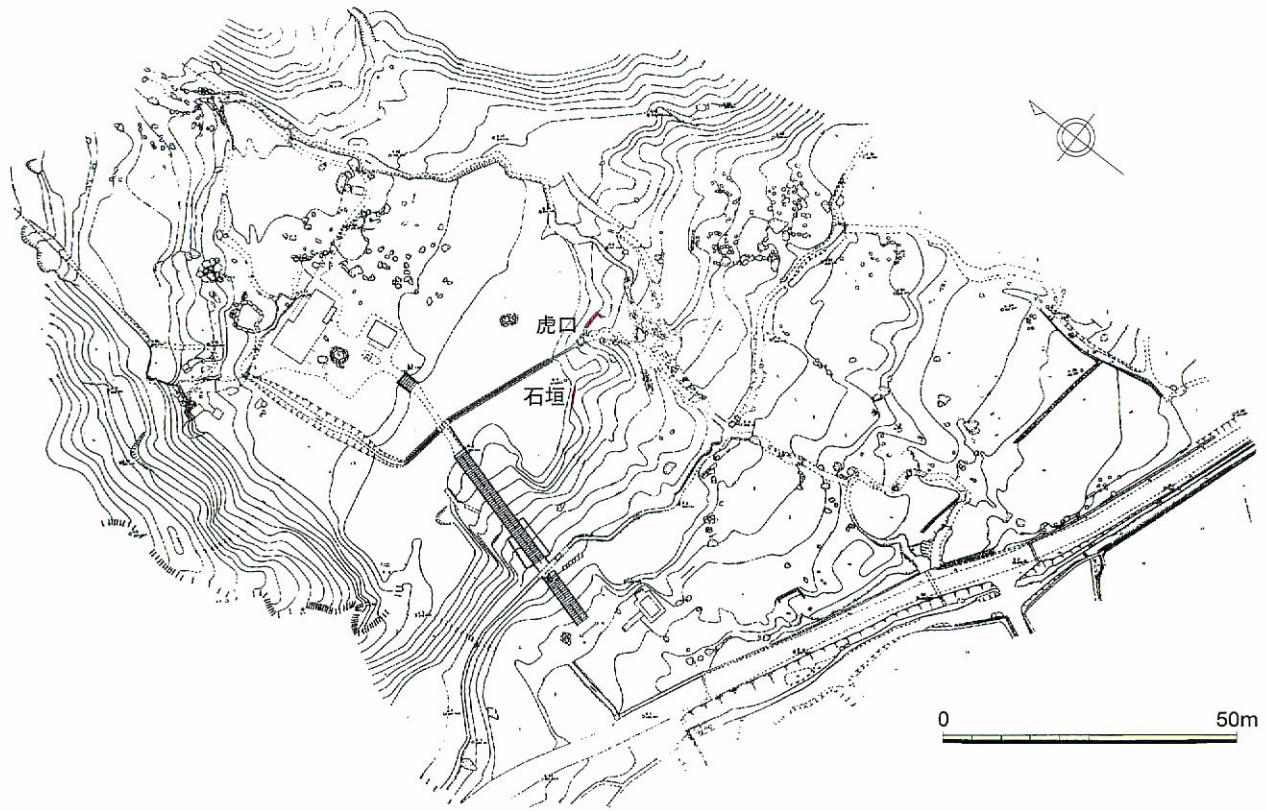
館跡の虎口（南から）

筑紫氏の館跡は、谷の一番奥まったところの勝尾城の南山麓にあります。現在は筑紫神社と呼ばれる一帯で「お館」という地名が残っています。

ここは筑紫氏が日常の生活をした館の跡ですが、単に領主の住まいというだけではなく、筑紫氏の領地支配の中心となる政治の場でもありました。当時は主殿、会所、茶室等に当たるような建物が建ち、領内を統治するような機能を備えていたと思われます。

館跡は、筑紫神社の石段を登ったところに南北約50m、東西約80mの長方形に山を切り込んで造られた館の主要部があり、その南東部分に石垣で作られた出入り口（虎口）があります。また周辺には館に伴うとみられる平場（屋敷地）が連なって造られており、館の背後からは勝尾城に登る道が延びています。





館跡測量図



館跡（南から）



館跡背面の平場

平成7年度に、館跡の確認のため発掘調査を行いました。狭い面積のトレンチ（試掘溝）調査でしたが、さまざまなことがわかってきました。第一に館跡が山からの土砂の流れこみで1m近く埋まっており、完全な形で残っている可能性が高いことが明らかになりました。さらに石垣作りの虎口では石段が確認され、館跡の前面は石垣で囲まれていたことも明らかになりました。館の中心部では現在の地表面から約80cmの深さで建物の礎石が確認され、また瓦も出土したことから、一部に瓦を使った建物もあったようです。館跡背面の平場では、火災を受けたのか焼け崩れた壁土も確認されています。

館跡からは陶磁器や土器が出土していますが、どれも16世紀後半のもので江戸時代に入るものではなく、館跡が筑紫氏による遺構であることが証明されました。